

11月 30日 (日) 創世記 31章	「神は、わたしの労苦と悩みを目に留められ、昨夜、あなたを諭されたのです」(42節)。ラバンに何度もだまされた忍従の二十年間を通して、ヤコブは兄エサウをだました自分の過去と向かい合い、主なる神の慈しみを改めて学んだのだった。そして今、主なる神の伴いを確信して故郷に帰るヤコブ。しかし、いよいよここから彼の信仰の闘いの本編が始まっていく。
12月 1日 (月) 創世記 32章	「ヤコブは答えた。『いいえ、祝福してくださるまでは離しません』」(27節)。兄がどれだけ自分への憤りと憎しみを募らせているか。兄をなだめる贈り物を先に行かせても、ヤコブの心は恐れに支配されていた。人間は罪の恐れを自分の力では解決できないのだ。しかし夜明けまで神にしがみつki食らいつくヤコブの姿に、祈りとは「神にしがみつkiこと」と知らされる。
2日 (火) 創世記 33章	「ヤコブはこうして…シケムの町に着き…祭壇を建てて、それをエル・エロヘ・イスラエルと呼んだ」(19－20節)。ヤコブの恐れをはるかに超えた兄エサウの大歓迎。「お前を祝福する」という主が弟と兄の間の「深い溝」に立ってくださった。「エル・エロヘ・イスラエル」とは「イスラエルの神の中の神」の意。神と共に歩む信仰生活は、礼拝場所を定めるところから始まる。
3日 (水) 創世記 34章	「ヤコブの息子たちが野から帰って来てこの事を聞き、皆、互いに嘆き、また激しく憤った」(7節)。ヤコブの息子たちは、妹ディナに対するシケムの凌辱に激しい憤りを抱き、凄惨な流血の結末に向かって突き進んでいく。シケムの蛮行は許されてはならない。が、このような時、主イエスの十字架の赦しを知らされた者としてどうすべきなのだろうか。重い問いが残る。

4日 (木) 創世記 35章	「さあ…ベテルに上ろう。わたしはその地に、苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神のために祭壇を造る」(3節)。主は、私たち一人ひとりへの恵みの約束を必ず守られる方。ラバンのもとで不条理な扱いを受けた時も、この主への信頼がヤコブに忍耐を与え、知恵を与え、人間としての成熟に導いた。その主への祭壇を整えていこう。
5日 (金) 創世記 36章	「以上が、エサウ、すなわちエドムの子孫である首長たちである」(19節)。父イサクの祝福を受け継げなかったエサウ(エドム)の子孫の系図が、創世記 36 章に丁寧に記されていて、その中にヨブの友人の一人、エリファズの名もある(10 節)。主の愛の「広さ、長さ、高さ、深さ」(エフェソ3:18)は、「選ばれし民」だけでなく、すべての民を包んでいることを知らされる。
6日 (土) 創世記 37章	「兄たちはヨセフをねたんだが、父はこのことを心に留めた」(11節)。父の寵愛を受けて育ったヨセフは、兄たちの心を逆なでする夢を平気で語る人間的に幼い男だった。そんなヨセフが苦労を重ねる中で神の器として磨かれていくのだから神の物語は不思議だ。人間の目線で人を裁くのではなく、神の働きの不思議を心に留める一呼吸の余裕を大切にしたい。
7日 (日) 創世記 38章	「『あなたのひもの付いた印章と、持っていらっしゃるその杖です』ユダはそれを渡し、彼女の所に入った」(18節)。ユダの長男の嫁タマルは、娼婦の身なりをしてユダと関係を持ち身ごもる。保身のためにユダの印章と杖をもらっていた。ユダはタマルを姦淫の罪で裁こうとするが、自分が与えた品々で身動きが取れない。救い主誕生に至る神の計らいなのだろう。